

日本文学研究資料叢書

今昔物語集

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

今昔物語集

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

今昔物語集

定価 1300 円

昭和 45 年 3 月 1 日 発 行

編 者 日本文学研究資料刊行会
発行者 有精堂出版株式会社
代表者 山 崎 清 一

東京都千代田区神田神保町1-39
発行所 有精堂出版株式会社
電話 03 (291) 1521~3 番
郵便番号 101

公和印刷

3393—550608—8610

目次

今昔物語集の価値	山岸徳平	一
「今昔」考 — 説話の時制と文体 —	春日和男	八
*		
宇治拾遺物語考	佐藤誠実	六
説話文学に於ける知足院関白の地位	池田亀鑑	二五
今昔物語成立年次覚書 — 小野博士所説について —	片寄正義	四
宇治大納言をめぐる	長野嘗一	五
今昔物語集と古本説話集について	川口久雄	六
今昔物語集の作者を廻って	今野達	三
今昔物語集成立年時「保安元年以後説」についての一傍証	橘健二	三
「卷二十七第三十七話」の欠字箇所考察	中野猛	一〇三
今昔物語集卷十五の編纂意識について	永井義憲	一一
今昔物語の作者と成立		

*

今昔物語集の伝本に就いて	丸山二郎	二六
今昔物語集伝本考	馬淵和夫	二三
今昔物語鑑賞	芥川龍之介	一四
小説史より見たる今昔物語集	岡一男	一四
説話文学の特性	池田亀鑑	一五
今昔物語集における説話的発想	西尾光一	一五
今昔物語の問題点	益田勝実	一六
フランス十三世紀の伝奇物語「ポンチュー伯の娘」のテーマについて ——説話の比較についての試み——	佐藤輝夫	一七
デカダンスの日本的形態 ——ことに今昔物語集の説話について——	楠山正雄	一八
説話文学の本質 ——「今昔物語集」をめぐって——	永積安明	二〇
欠文の語るもの ——今昔物語集研究の序章——	池上洵一	二七
*		
今昔物語の研究	赤峯太郎	三七
蘊しべ長者と蜂	柳田国男	三三
打聞集と宇治拾遺・今昔物語の関係	片寄正義	三九
宇治拾遺物語の評価についての一考察	国東文麿	四〇

古本説話集の成立と宇治拾遺物語……………野口博久…二五

説話文学の用語——主として今昔物語集について……………岩淵悦太郎…二六

今昔物語集における欠文の研究……………馬淵和夫…二七

今昔物語集に於ける和漢両文脈の混在について……………山田巖…二八

*

資料編

井沢長秀考訂「今昔物語」序……………二九

今昔物語問答……………三〇

続本朝通鑑 第三十五 白河天皇 中(抄)……………三一

類聚名物考 卷二百六十九 書籍部七 隨筆 譚話 雜類(抄)……………三二

*

解説……………高橋貢…三三

今昔物語研究参考文献……………三六

今昔物語集の価値

山 岸 徳 平

一、はしがき

今昔物語集の価値は、その内包の多様性に在る。文学史的には、説話文学系列中の一個の大きな山であり、国語史的には、過渡期の様相を探索する多くの資料を提供する。又、文体の方面には、平安時代の流れを集め、更に鎌倉時代に及んで現れる和漢混清文乃至は軍記物の文等、近古以後に於ける多くの文体方面へと流れ出す如き、過渡期的な貯蔵所とも見られる多様な内包を持つて居る。其の他、社会史や風俗史等の方面にも、又 Märchen としての研究にも、甚だ多くの資料を包括してゐる。之は、他の文芸作品中、殆ど其の比を見ない点である。尤も、此の如き多様性は、純然たる文芸作品と対照比較すれば、一面には不純な辭を蒙る事があるかも知れない。然し、それ等に関せず、説話文学としての存在価値は、高く評価せられて居るものである。Märchen としての研究方面は、かの Johannes Bolte 及び Georg Polivka 両氏の試みた Grimm Märchen-Anmerkungen や、同く Johannes Bolte 及び Lutz Mackensen 両氏の著した Hand-wörter-buch der deutschen

Märchen の様な研究に見る様な開拓は、まだ実行せられてゐないが、この方面の研究も徹底すれば、今昔物語集は優に、その点だけでも世界的なものとなり得るに相違ない。

二、説話文学としての今昔物語集

今昔物語集は、説話をあらゆる分野に亘つて網羅して居る説話集である。就中、宗教的方面に関係を持つ種類が多い事に目立つてあらう。今こゝに、説話文学と称せられるものを、便宜上、瞥見して、今昔物語集の位置と性質とを見よう。

一般に、説話文学と呼ばれて居るものには、自ら二種の系統が認められる。その第一種は、古伝説や、又は純粹な巷談街説と称せられるものであり、他は仏教又は僧侶等に関係を持つ宗教的性格のものである。その第一種の中、古伝説や巷談街説方面を觀察すると、そこにも亦自ら二種の潮流の存在がある。その一つは、記紀風土記等に記載せられた神話や民間伝説や、民間地名語源解釈説話などが、その主要なものである。これ等は、上代民族の心の反映であり、又自然界に対する解釈である。故に、各種の現象にも事実に

も、合理的な説明は与へられて居ない。奇蹟的な要素や、不思議と考へられる解釈が甚だ多い。要するに、殆どすべては、上代民族の幼稚な觀念の世界の存在以外の何物でもないのである。故に記紀や風土記等に記載せられた説話には、不合理な事実も人物もあり、事件も単に幾つかの出来事の只羅列に過ぎない簡単なものも多い。従つて、お伽斬をすらも、神話の残滓であるかの如く説く人もある。お伽斬が神話の残滓であるか否かは、又別問題として、兎に角、上代の空想的な心理から生れて来た、それ等多くの説話の中には、各地に共通なものもある。それは独自に各地に発生したものもあり、或は口から耳へと漂流して伝播したものもある。何れにせよ、以上は主として非現実的な世界を語る事が多い性質を有するものである。

次に、古伝説や巷談街説方面の説話中、他の一つは、世俗説と称せられる種類に属するものである。今昔物語集には、全く世俗説として、上乘なものが非常に多いのみならず、多方面に亘つて採集せられて居る。その世俗説が即ち、巷談街説である。然るに、巷談や街説も、記録せられて説話物語として存在する場合には、伝説や歴史と交錯する傾向が非常に強くなる。この点は又、今昔物語集に於て明瞭に認められるものである。且つ、歴史も亦、時間の影響を蒙ると、次第に伝説的傾向を強く、又多く帯びて来るものである。蓋し、市井の簡単な出来事でも、或は英雄の行動でも、それを語る者乃至は記録する者によつて、同一事件すら、必ずしも同一に表現せられないものである。何となれば、それが広く世間に流布して行く途中に於て、それを語り伝へる人の思想や信仰や思慕が、次第に附加せられて、想像的要素が漸次多くなつて行く。又、語る人は、決して作為する様な意識も目的も持たなくても、語る者の記憶は、時

間の経過するにつれて、不明確になる。その結果、語り誤つたり、語るべき部分の若干を忘却したり、或は自己の精神上に、最も強かつた印象又は感銘の有つた部分を、常に最も明確に意識して居る爲に、そんな部分が、特に強調せられる場合が少くない。さうした結果、仮構的・想像的要素が附加せられると、文学的にはなるが、自ら異説や異話を生じて来る。故に、歴史と伝説とは、その術語は、觀念の上には容易に區別し得るが、実際には區別し難い性質のものである。かの Sir Walter Raleigh 氏が、世界史第二巻の執筆中、一日、戸外に出て、或る事件を観察した。その後、間もなく、同じ事件を目撃した他の人の報告を手にして、全然自己の觀察と相違して居る事に驚いて、当時執筆中の世界史第二巻の草稿を、焼却してしまつたと伝へられて居る。即ち、前述の如く、語る人又は記録する人の、思想や信仰や思慕や想像が、時間の長短と、語る又は記録する人の、手や口を通す事の多少に正比例して、附加せられて行くのは、明瞭な事実である。故に史料的な日記や記録でない限り、伝説は勿論、説話的な歴史に於てすらも、可なり伝説的な要素を含む事を考慮しなければならぬと思ふ。殊に、一般大衆が、英雄讃仰的な心理を持つて居れば、それが時代精神となつて反映して、そこには、説話や伝説が、自然に、叙事詩的なものに向させられるであらう。又、一般大衆が、宗教心の旺盛な時代であるならば、宗教伝説や聖僧などに結びつけられる事も、極めて自然である。それは、唯に時代精神に關係するのみならず、作者の個性や信仰や思想等にも、勿論關係はある。然し、大衆は、それ等の説話や伝説を、単に説話として語つて行くだけで満足して居る。決して、他の外部的な目的、即ち宗教宣伝等の爲に用ひる様な事は、殆どないのである。但し、この外部的な目的を認識して居る作者も、後には勿論現れて

居るが、大衆は、必ずしも作者の目的を理解しないのが、一般の様である。

兎もあれ、伝説と言ひ歴史と言ひ、巷談俗説、即ち世俗談と称しても、本質を全然異にするものではない。今日の世俗談は、明日の歴史であり伝説である。今昔物語集は、かゝる方面から見ても、実に代表的な説話集である。今昔物語集に継ぐものとしては、宇治拾遺物語や、古今著聞集などもある。宇治大納言隆国の物語も別に在った様であるが、今日明かでない。けれども、古今著聞集の題名に影響せられたものには、江戸時代になると、新著聞集、江都著聞集、猿著聞集などが現れて居る。又、今物語や小訓抄の如きは、古今著聞集と相並んで、同じ頃に現れて居るが、十訓抄は、その題名によつても考へられる様に、作者は、教訓的な意識を持つて述作したものである。その点は、宇治拾遺物語など、創作動機を異にすると言へよう。その点は、宗教的ではないが、寧ろ宗教的な意味の説話集に類似する傾向を持つ所である。また、古事談や続古事談、唐物語などもある。唐物語は、平安末期のものらしいが、内容は言ふまでもなく支那の故事である。

要するに、世俗談は、語る人、記録する人々の、詩才や想像や、信仰や思慕等が、たとひ附加せられて居たにしても、単なる巷談・街説として始終するものである。故に、巷談・街説として、口から耳へと伝はり、それが記録せられて固定したとしても、固定する以前の作者又は話者は、明確でないのを常とする。故に或るものは、大衆の詩才や想像や思慕や信仰の間から生れたものとも、謂はざるを得る性質をも持つて居る。

さて、以上掲げた第一種に對立する第二種は、即ち、仏教文学系統に属する一群である。

仏教説話——広く言へば宗教説話であるが、これは宗教的乃至は道德的な教訓を与へようとする点に、その理想を持つて居る。この点は、前記の世俗談若しくは古伝説などと自ら性質を異にする所である。さうして、多くの場合、一定の作者若しくは明瞭に知られた作者を持つのが、普通である。これに属するものとしては、南都・薬師寺の沙門なる景戒が、弘仁年中に編した日本国現報善惡靈異記がある。尤も、この書は、景戒の独創になつたものではない。唐の唐臨の冥報記や、或は般若記を参考にしたものである。但し、この般若記は、蕭瑀の金剛般若靈驗記であるが、孟獻忠の金剛般若集驗記であるか、その何れかであつたらしい。但し、中巻の閻羅王使鬼得所召人之略（以免縁第廿四の中に「大唐德玄、被般若力、脱閻羅王使所召之難」、日本警島受寺商錢、脱閻羅王使鬼追召之難也」とある德玄の事蹟は、孟獻忠の集驗記卷上なる救護篇第三章に見えて居る。それ等によつて、景戒が謂ふ所の般若記は、恐らく孟獻忠のものを指すのであらうと、橋本進吉博士は述べられた。兎もあれ、景戒の創作目的は、善惡応報の因果を大衆に知らせるに在つた。その目的を達成する為に、景戒は法華經の功德を力説したのである。この系列に所属するものには、三宝絵詞がある。これは源為憲が、冷泉天皇の第二皇子たる尊子内親王の命を受けて作つたものである。出来たのは、円融天皇の永観二年であるが、仏教と文学との關係を密接ならしめた点は、誠に重要なものである。その後には、驗記や往生伝の類が、次第に多く現れた。例へば、驗記としては、鎮源の本朝法華驗記——詳しくは、大日本国法華驗記がある。又、現存しないが、英恒の本朝法華驗記や智源の法華驗記の類もあつた。或は、多少性質を異にするかも知れないが、天仁年中に、説法の講話を聞き書きした、法華修法一百座法談抄の如きものもある。

又、往生伝に属するものには、慶滋保胤の日本往生極楽記が華山天皇の寛和二年頃に述作せられた。これは、支那に於ける戒珠が往生浄土論等に刺激せられた事は、その序に明である。これは、三宝絵詞や源信僧都の往生要集など、殆ど同じ時代である。その後になつて、堀河天皇から崇徳天皇頃にかけては、大江匡房の、続本朝往生伝があり、三善為康の往生伝及び後拾遺往生伝などがある。又、筑紫の沙弥蓮禪の、三外往生伝がある。三外とは、保胤、匡房、為康三人の往生伝以外の義であつた。又藤原宗友の本朝新修往生伝も出て居る。

一般にこれ等の著作には、其の序文に、創作の動機を掲げて居る。その点が、前にも掲げた如く、何等かの外的目的に拘束せられる所以であり、巷談や街説又は神話や民間説話と趣を異にする所以でもある。総じて、仏教説話に関するものは、大体に於て、素材を現実世界の事実を取つて、仏教信者の生活を、感覚的に記述したものである。中には、多少仮空的な要素がたとひ存在したとしても、誰が何処に如何なる事をして、如何様になつたかと、全く現実的、感覚的な世界の出来事が、まざまざと表現せられて居るのである。若し、これが超感覚的な觀念の世界の事として、述べられてゐるとすれば、如何に、奇跡的信仰の旺盛な人達でも、一般の大衆である限り、理解する事が困難か、ともすれば不可能な場合が多い。従つて、一定の動機によつて創作せられても、その目的を達する事が、容易に出来ない事になるであらう。されば、かゝる方面の説話集によつては、その述作せられた時代々々に於ける大衆の、信仰傾向や宗教意識を、如実に窺ふ事が可能であり、そこに又、かゝる述作の本質も存在するのである。

要するに、かくの如き大衆的な宗教説話によつて、奇跡的な因果

や功德や信仰の意義を考へさせる為に、法華經——その中でも特に觀音に関する功德や、又、西方極樂浄土への欣求往生の利益によつて、大衆を宗教的な思索へと誘引したのである。かう言ふ点から考察すると、宗教文学——狭くすれば仏教文学に関する説話は、教訓文学の一面を有し、同時に又、寓話的な性質をも具有して居る。そこには、知的な冷靜さが加はるかも知れない。それは、歌物語などが、美的な情緒を湧き起させる点、言はゞ感情的な暖みを有する点と、自ら相違する所であらう。以上の外に、寺社の縁起を記したものの、中にも、仏教文学としての説話に相当するものが、極めて多い。その事は、今改めて述べる迄もない。例へば、古くは醍醐寺縁起や、長谷寺縁起や藤原明衡の清水寺縁起などがある。その外、信貴山縁起や石山寺縁起、粉河寺縁起、矢田地蔵縁起、清涼寺縁起、道成寺縁起、乙寺縁起などがあり、又伝記的なものには、華嚴祖師絵伝や、舜昌の法然上人行状圖、忍性の鑑真和尚東征縁起、覺如の拾遺古徳伝などがある。当麻曼陀羅縁起や北野縁起や春日権現縁起なども、当然この系列中に編入してもよいものであらう。かゝる種類は、室町時代を経て、江戸時代に至るまでには、非常に多く出現して居て、一々枚挙するに遑のない程である。

さて翻つて、今昔物語集を検すると、かくの如き仏教文学に関する説話をもあらゆる方面に亘つて、網羅して居る事は、前述の通りである。即ち、景戒の日本国現報善惡靈驗記や三宝絵詞をはじめ、実審の地藏靈驗記等の説話は、何れも今昔物語集には採集せられて居る。謂はゞ、百川皆一旦これに注いで居ると言ふべきものであり、又、一大宝庫でもある。この貯水池又は宝庫の中から、鎌倉時代以後の諸々の作品は生れて行つたとも言へる。

故に我が国唯一の古説話集であり、無比の浩瀚な著述である。印

度の本生譚 (Jataka) や五部經 (Pancatantra) など、同一水準に、尊重すべき、貴い説話集である。

以上は、説話文学を大観して、今昔物語集の性質及び地位を明らかにし、同時に今昔物語集の説話文学としての価値を略述したのである。

三、今昔物語集の包

今昔物語集の編著者の熱心と努力とは、印度及び支那の伝説や信仰や思想にも出入し、又我が民間の各種の説話をも、蒐集し大成した。それ等の点は、説話文学としての外に、文化史的にも、比較説話学上にも、実に国宝的な存在価値を輝かして居る。又、社会史的な観点からすれば、平安末期に於ける社会相を如実に物語つて居る。従来他の物語は、宮廷中心であり、貴族生活を描いたものであつた。然るに、今昔物語集は、上下あらゆる社会の生活に触れて居るが故に、庶民生活を知る唯一の資料に供する事が出来る。

例へば、鈴鹿山や、老の坂や奈良坂などには、白昼でも群盗が横行した。海賊の事は土佐日記にも見えて居るが、この時代でも、同じ様に各所の航路には、海賊の出没が絶えなかつた。又、鷹狩の事なども少くない。それは、貴族や武士の外、庶民にも流行した好尚であるとも考へられるが、その反面には魚鳥の肉が、古来我が国民には、非常に嗜まれたものであつた事も考へられる。塩鮭や鯛や鯉や、鯉や鮎や蛤などは、屢々見える記載である。鷹狩には雉子も可なり多く獲られた。雉の股の肉は大臣の大饗の折には用ひられた。又雉酒も用ひられてゐる。之は今日でもお正月には、畏きあたりなどにお用ひになられる様である。又、蛇を魚肉と偽られて、買つて食べた公卿達もある。案外、美味だつた様でもある。獣には、鹿や

猪や兎が主要なものらしかつた。それ等と連関して、当然考へられる事は、料理法であるが、その方面は特に見るべきものがない。思ふに調味料とて、今日の如く発達して居なかつたから、案外淡泊なものではなかつたかと想像せられる。料理法の発達したのは、鎌倉以後の様である。北条高時が酒宴を好んで食膳を豊富にし、頻りに奢侈に流れて、遂には元弘様の料理と言ふ如き名目をも発生せしめた。庭訓往来には十月、衣鉢某甲が監守に返しした消息の中に、「……点心は……砂糖羊羹……」と見えてゐる。故にこれ等から推測して、砂糖の輸入は禅僧が渡来して伝へたものらしい。点心は既に禅家の用語である。点心に砂糖羊羹であるから、恐らく鎌倉に入つてからの渡来ではなからうか。砂糖の渡来以前は、甘葛(アマツラ)即ち甘茶を煎じたものを用ひたり、蜂蜜や干柿や甘酒などが存在した。然し、それ等を砂糖に比較する事は、不可能な程、産出の分量に於ても、劣つてゐる。砂糖の伝来は料理上一時期を画した事であつたと思ふ。兎に角、足利時代になつてから、將軍以下、將士の奢侈贅沢が増長し、又將軍の「御成り」と称して、諸侯を訪問する事や招待せられる事が頻繁になつた。その結果は、宴遊や茶会も流行し、それに財を傾けて数寄を凝らす様にもなつた。その為、料理法も一段と長足の進歩をなし、遂に元弘様を遙に凌駕する様に行つた。四条流や大草流の料理専門家も出来て、料理の塩梅は愈々複雑微妙になつた。例へば、同じく刺身のつまでも、鯛には生姜(セウガ)、鱸には蓼、鯉には山葵(ワサビ)を用ひる等、それぐの区別があつた。その点は、今日一様に山葵を用ひる様な、言はば殺風景な事は、絶対になかつたのである。但しそれ等は、近古的・近代的のものであるが、今昔物語集に見える魚鳥の肉類、その他の調理は、かゝる複雑なものではなかつたと思はれるが、酒が盛んに

用ひられた事は、後世と変りはない様である。又、海草の乾燥したものも、多く用ひられてゐる。その他、茸類も食べるが、誤つて毒茸を食べて笑ひ出した者もある。酒の中に、朝顔の種子を磨りつぶしたものを入れて、検非違使の官人等を、忽ちに下痢させて追ひ帰した越前守為盛の様な者も居た。朝顔の種子の中に、下痢をさせる様な強い成分の存する事は、今日の薬学上には認められて居るが、かゝる説話集中に見る民間の事実が、今日の医学の上にも暗示を与へる事が、たとひ稀にしても存在するのは、興味ある事実だと思ふ。薬学に連関する事ではあるが、病人に対しては、湯治の事がある。我が国の如き温泉の多い処に、温泉療法が早くから知られて居るのは、当然であらう。又、漢方医術の外に、祈禱が多く用ひられて居る。漢方に関しては大同の類聚以来、千金方其他医書も非常に多くなり、自ら病気の数も増加し、医術も可なり発達して居た様である。後に出たものであるが、病草子の如きものに於ても、珍奇な病氣と思はれたものを掲げて居る。今日から見れば、背虫とか、齒槽膿漏とか神経衰弱らしい不眠症や、眼病や、鼻の黒くなる遺伝的の疾患や直腸癌かとも思はせる如き症状者をも、それぞれ掲げて居る。病原の事は、古い時代のものとしては、誠に興味ある絵巻であるが、丁度 Eugen Hollander 氏の *Die Medizin in der klassischen Malerei* に見る様な場面もあつて、興味が深い。或は今昔物語集に関して、かくの如き方面への研究を進めて見る事も亦、興味なしとしないであらう。然し、一般には、病氣に巫女や陰陽師や、僧侶が重んぜられて居るのは止むを得ない事であらう。その他、住居や衣服や、調度なども、庶民階級の生活を示す重要な記述が少くない。或は経済生活なども知られ、物々交換の存在等も明かに知られる。要するに、今昔物語集の内包は多様である。

又、単に説話として見て行けば、継子憎みの如きを材料としても、それは、落窪物語などもそれであり、グリム童話の第廿一話な *Aschenputtel* 型のものに統括する事が出来る。同時に英國の *Cinderella* や仏国の *Cendrillon* 即ち、黒貂の皮の小さなスリッパ *la petite Pantoufle de Verre* や同じ型となつてしまふ。「黒の皮の小さなスリッパ」なのであるが Charles Perrault 氏の *Contes de Fées* から英訳する時に、黒貂の皮なる *Verre* を *Vair* と思ひ誤つた為か、「硝子の小さなスリッパ」と訳されてゐる。さうして、それが西暦紀元第一世紀の頃に、当時の旅行家、地理学者、Strabo 氏の地誌のエジプトの条に見えると言ふ Rhodopis の説話とも共通な型になり、世界各地に存在するこの型の説話に統括せられるのである。今試みに *Marchen* として取扱ふ場合の公式とも称すべきものを掲げて見よう。然らば、同一型の中、異なる要素を有するもの、或は部分的に忘却せられたものの伝唱乃至記録せられた説話の存するもの等も、一目瞭然となり、取扱が極めて容易になるであらうと思ふ。即ち、或る型の公式とも称すべきものを、 $A, B, C, D, E, F, \dots$ の如き記号を以て表はし、それ々々の中にも、色々の異同があるから、更に $A_1, A_2, A_3, A_4, A_5, \dots$ の如く分類する。 $B, C, D, E, F, \dots$ に於ても亦、同様である。此くの如くに取扱ふ時には、継子憎みならば、落窪以下住吉物語、鉢かつぎや、岩屋の草子、異本岩屋の草子や、秋月物語や異本秋月物語や、凡そこの型に属するものは、簡単に表はす事が出来る。即ち $A_2, B_3, C_1, D_4, E_5, F, \dots$ とか、 $A, B, C, D, E, \dots$ の如く簡明となる。尤も、この $A, B, C, \dots$ には、それ々々の定義的な説明をして置かなければならないのであるが、多くの同型の説話を取扱つて居れば、それは容易である。この種の方法は、既に前記の Johannes Bolte 氏や Georg

Polivka 氏等の採用したものであるが、A. Lang 氏等の folk-lore Society の研究を、更に一步進めた取扱方であると思ふ。

兎もあれ、実例を掲げる事は省くが、かゝる方法的取扱が、今昔物語集の、特に世俗談的の方面に十分に応用せられ、活用せられる事は、極めて望ましい事であると思ひ、又須用な事ではないかと考へて居る。蟹満寺の縁起でも、後の藤袋原子に連関したり、意外な説話同志が、実は接近して居る事を明らかにする事も少くないのである。

要するに、これ等の外、あらゆる角度から眺める事によつて、愈々今昔物語集の多様性を發揮せしめる事が出来る事の、僅に一端を右に掲げたものである。即ち、説話物語としての外に、平安中期以後、貴族から庶民に至るまでの社会生活の内面、外面のあらゆる点を、今昔物語集は示して居る。その点が社会史として風俗史として、又思想史として、或は文化史としても、その価値が甚だ大きい事を掲げた。殊に Märchen としての研究が十分に開拓出来れば、その点だけでも、世界的のものとなるであらうと思ふ事を略説して置く次第である。

〔古典研究〕五卷八号 昭和五年七月発行

「今昔」考

— 説話の時制と文体 —

春日和男

一

ここに「今昔」というのは、説話文の冒頭に置かれる「いまはむかし」という常套句のことであるが、かの今昔物語集の各説話の文頭形式をなす字面と、その一般的訓みに鑑み、仮に題名として、借用したまでである。対象はかくも人口に膾炙した熟語であり、且つ小考が取扱う方法も極めて素朴単純なため、今更めいた感じさえするのであるが、在来の通説に何等かの新見を加えうれば幸いである。

「いまはむかし」、この説話の冒頭におかれる形式的な熟語の意味が余り明確に理解されていない。それは用法の形式化が著しく、また長い時間の経過の間に意味・機能の変遷を、遂げたが為に、実際にこの常套句を用いた人びとでさえ、その真義に思い及ばなかった節があるのではないか。「今となつては昔のことであるが」、「それは昔のことですが」、「むかしむかし」等々訳文には大同小異が見られるが、果たしてそれが原義であるうか、問題の発端はこのような疑義から起こるのであるが、まずその解釈文について瞥見しよう

と思う。

「いまはむかし」の解釈において、「今」と「昔」との関係はいかに見るかということでもまず分類すれば、大体二つになると思う。その一つは、「昔」を「今」に対立させて強調する観点である。つまり「今」に余り重点を置かず、単なる時の比較の基準と見るもの、それは結局「むかしむかし」に他ならぬものである。試みに田中大秀の「竹取翁物語解」における取りあつかいを紹介すれば、次のようである。

凡て物語といふものは、過ぎにし事を後れてまねぶものなれば、此物語をはじめて、世々の物語ぶみ、今の世の俚び物語に至ても猶昔々と談り出るなむ古き効ひなりける。

右は江戸時代の「いまはむかし」に対する考えを代表するものであるが、「過ぎにし事を後れてまねぶ」といい「昔々と談り出る」ということは、現在から見て昔、つまり「むかしむかし」の意に相違はないであろう。この様な観点は、「いまでは既に昔の話となつたが」、「今から見ると昔のことですが」となつて、在来の注釈の主流を形成してきたものである。注釈書の一つ一つに当たる余裕もな

いので、日本古典文学大系における諸篇に見る、頭注および補注の概略を紹介すれば、

竹取物語「今ではもう昔のこと」(頭注)「物語や説話の冒頭に用いられる慣用的な句の一つで……末尾の「とぞいひつたへたる」に呼応して現在から言えば昔の、あるいはもう信用できない話かも知れないが、という気持をこめており(三谷榮一氏)、それが「けり」という助動詞の用法とも関連する」。(補注)(以上阪倉篤義氏)

落窪物語「現在においてはその事は昔の事だが。伝誦的な話し出しの形式」(松尾聰頭注)

平中物語「今ではもう昔のことになったが」(遠藤先生、頭注)

宇治拾遺物語「むかし。むかし。説話の冒頭形式句」。(渡辺綱也・西尾光一氏頭注)

という具合に大同小異であって、いずれも昔を今に対立強調させるものであることに相違はない。

次にその他の一つの観点を説明しなければならない。それは、坂井衡平氏著「今昔物語集の新研究」に見えるものであるが、氏は隠逸物語の「今は昔の事」とある条を引用して、次のように述べられた。

「目前に見聞せし事も、十年過ぎ廿年、卅年を経て世上ともに移り行くこと少からず、今の時をも昔とてしのぶ人もあらんかし」(巻四・一一・一二枚)と述べたり。さればこれ今の事がやがて昔と見られんと言ふ意ならんが、是も集の今は昔の意にはあらじ。

つまり、現在を昔に置いてしのぶという解釈を否定されたのである。然し、その後で

所謂「今昔」とは「今ははや昔の事なるが」の意、詳言すれば「今と思ひて現実に経験せし事相の、早やくも昔となりぬるよ」の咏歎的用法なるべし。(七一P)

と述べておられる。「今ははや昔の事」の意は余り明快でなく、あるいは既述の第一の対立的観点を思わせるものがあるが、詳言で敷衍された所は、前に否定された隠逸物語の説く「今を昔に置く」観点と共通のものを思わせる。

さてこのような考えは、後に馬淵和夫氏によって、全く別の方法において主張されることになった¹⁾。氏は「乃登叡山付囑先師時年十有五。今年大同三年也」(慈覚大師伝)のごとき「今年」の用法に注目され、「今」字、つまり「いま」のあらわす意味として、

「いま」は過去のある時に自分を置いて、その時を「いま」ということもある。つまり歴史的現在の「いま」ということもある。

とされ、これを「今昔」の字面に応用して「それはむかしのことなのです」と説かれた。漢字の用法から帰納されたこのユニークな説は、日本古典文学大系では、今昔物語集や宇治拾遺物語の補注に引用され、しばしば推奨される所となった。今昔物語集一では、

普通「今は昔のことになりましたが」とか「今から見ると昔のことですが」というように考える向きが多いが、説話を語る人がそのような空々しい気持で語り始めたかどうかは大いに疑わしい。

最近馬淵和夫氏は「今」を過去のある時に自分をおいた表現なりと考え「それは昔のことですが」ととるべきことを説かれたのは傾聴に価する。(山田氏、補注)

とあり、また宇治拾遺物語の補注においても、同説の紹介があつて、更に、

「これも……今は昔」だという表現は、「今は昔」が単に時間的

な内容のみをさすのではなくて、説話を一単位として提示するための形式的表示の意味をもあわせもつことを示しているのではあるまいか。

と述べて、その意味の形式化を強調されたが、意味の変遷という立場では、まさにその通りであろうと思う。

以上「いまはむかし」の意義について、「昔」を「今」に對立強調する観点と、「今」を「昔」に置く観点の二つがあることを述べたのであるが、わたくしのこれから述べようとする所は、むしろ後説を批判発展させたものであることをまず明らかにして、以下この二つの流れに沿って詳述して見ようと思うのである。

注

(1) 馬淵和夫氏「説話文学を研究する人のために」『国文学』解釈と教材の研究三ノ十一、七九P

二

まず「昔」を「今」に對立させる観点について考える。元來、時制における「昔」つまり過去（乃至は未來）の概念は、「今」即ち現在との相対性の上に立つて始めて把握られるのであるから、「今では昔」の「今では」は、單なる比較の基準としての形式的価値しかないことになり、その意味で「むかしむかし」と同じであると考ええることは自然であろう。のみならず「今」は、確かに「昔」に對立しうるものであった。「いま」には「更に」とか「直ぐに」とかいう意味が別にあって、「いまひとたびの」、「いま来むと」（come anon O.E.）のとき用例は、別に珍しいものではなく、上代にも、

……久有 今七日許 早有者 今二日許あらむとぞ君は聞こしし

な恋ひそ吾妹（分集十三・三三二八）

門にぬし娘子は内に至るとも痛くし恋ひば 今還金（十三・三三三二）と見えるから、「今」は未來に對しても指向性を持っていることは明らかである。これは單に日本語に限ったことではなく、英語における現在形（Present Tense）の用法に鑑みても同様であるらしい。いわゆる Psychological Present が幅を持った概念として与えられるならば⁽¹⁾、その幅は、いわば未來の方向に広がっているといえそうである。それはまたフリデン（Georg Friden）のことばに従って、「現在より未來にわたる時圏をあらわす⁽²⁾」ていのものである。ひらたくいえば、日本語の「今」また「前向き」の姿勢にあるものであって、少なくとも、「後向き」のものではあり得ない。端的に表現すれば、「今」にとつては、「昔」などはどうでもよいことになる。この意味において「今」はたしかに「昔」に對立するものであり、「今」から見れば、「昔」との間に越えられぬ溝が横たわっているようなものである。この見地に立つ限り、「今では昔のことであるが」という表現自体には、誤りはないであろう。然し「いまはむかし」という熟語の意味として、この「今」と「昔」の對立的な表現があてがえるかどうかということは、また別問題である。それと同時に、後の解釈、つまり「今」を「昔」の位置に置くという觀念が、仮に心理的にもせよ、可能であるかどうか、甚だしく疑問とせざるを得なくなるのである。

そこで「今」を「昔」に位置づける解釈について、少しく触れるが、これの最も合理的に説かれてあるのは、先述の馬淵氏の説であるので、主として氏の示された用字に基づく方法論に従って考察を進めることにする。まず先述のごとき「今年」という字面が、過去の時を指示しているということから、この論旨は始まるのである。

しかし「今」字はもともと、遠称の「ソノ・ソレ」に相当する意味はなく、「今年」がコトシと訓めるように、近称の「コノ・コレ」が意味として適合する。「今」字は、説文に「是時也」と見え、経伝釈詞には「指事之詞也」とある。つまり近称の指示代名詞ということになる。されば観智院本類聚名義抄には「音金・コム・イマ・コレ」、同じく「今来」には「コノ・コロ」といずれも近称の訓が見られる。訓点資料ではすでに築島裕氏が指摘しておられる(3)ように、

自(から)歎クラク今朝初(めて)聞(く)ことを得たることを始(め)て知(り)ヌ。(白子文集第三 天永点 五絃御)

京畿 尽く今秋税を放セリ(ユルス)。(同第四 杜陵受)

「今」字にはコノの訓が与えられているのである。さすれば、「今年」はコノトシとよむべき字面であつて、過去の年を言語主体の現在地まで引き寄せて、コノトシと指示していることになる。同様にして、「今昔」コレハムカシ・コノムカシと訓んで、「昔」を「今」なる現在地に引き寄せて指示したことになる。「いまはむかし」は「それはむかし」という遠中称の指示ではなくて、「これはむかし」と同様の近称の指示なのである。この様相は、助動詞ケリが持つ現在性、つまり過去からの動作を現在地点に迎えとる形(4)と全く同じであるわけである。

先述のごとく、「今」の概念がいわゆる「前向き」であるなら、その「今」をもって過去のある時に溯らせることは、実は無理な理念であると思われるので、「今」に「昔」の概念を付与して「昔」に位置づけることは、困難なはずである。反対に「昔」の概念は、過去という時間帯において伸縮自在であることに鑑みれば、むしろ「昔」をこそ「今」に向かって引き寄せ近づけ得ると感じとるのが自然ではないだろうか。即ち、「昔」は「今」に向かって近づくこ

とはできるが、「今」は「昔」に向かって近づくことはできないという不可逆的關係を想定することは無理であろうか。その証左として、数首の歌を挙げてみよう。

いにしへのしづの小田巻繰り返し昔を今になすよしもがな

(伊勢物語三)

さしながら昔を今に伝ふれば玉の小櫛ぞ神さびにける

(源氏物語若菜上)

かへり来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕に匂ふたちはな

(新古今三・二四〇)

年なみはかへらぬ物と暮れぬめり昔を今に思ひなせども

(新千載一六・一八四三)

忍ぶれどかへらぬ物をなにとまた昔を今に思ひ出づらむ

(続拾遺二八・一二五六)

右に見るように、古くから「昔を今になす」乃至は、「昔を今に思ふ」という発想がしばしばあらわれ、しかもこの逆の「今を昔に」のごとき発想は管見ではない。心理的にも昔を今に近づけることが自然であると考えねばなるまい。

物語的現在 (Historical Present) あるいは、劇的現在 (Dramatic Present) の手法が語法上のものか、修辭上のものかには論があるようであるが、ともかくそれに近い感覚は「昔を今に近づけて、一致させる」ていいたるものではないかと思う。フリデンが物語的現在について「過去のできごとを語るその時に起こったごとく描写する手法」と説いてゐるのも、極めて当然のことである。

注

- (1) 細江逸記氏「動詞時制の研究」(Present Tense 一七d以下)
- (2) Georg Friden "Studies on the Tenses of the English Verb"